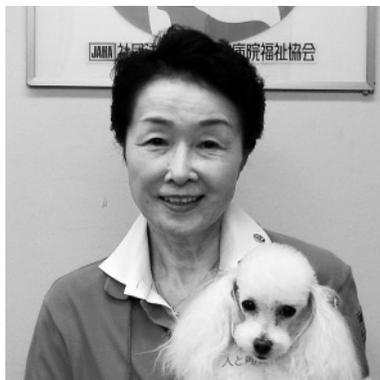


動物との絆を信じて

公益社団法人日本動物病院福祉協会顧問
赤坂動物病院院長
柴内 裕子



しばない・ひろこ 東京生まれ。1959年、日本大学農獣医学部獣医学科卒。1963年、赤坂獣医科病院（現赤坂動物病院）を開設、院長となる。日本動物病院協会第4代会長等を歴任。現在、赤坂動物病院院長、公益社団法人日本動物病院福祉協会顧問等を務めながら、NHKのペット関連コメンテーター等としても活躍。著書に『子どもの共感力を育む——動物との絆をめぐる実践教育』（共著・岩波書店）ほか多数。

アニマルセラピーとは

アニマルセラピーという言葉は、なんとなく「動物によって癒される」と理解されるようになってきました。しかし、耳にしたこともなく、初めての方も多いのかもしれませんが。

広い意味では、前述のとおりですが、実際にこの活動が行われている現場では、その内容によって大きく「動物介在活動」「動物介在療法」「動物介在教育」の3つに分けられます。

①動物介在活動 (Animal Assisted Activity=AAA)

AAAは動物とふれあうことで、対象となる人の生活の質の向上、情緒的な安定、また教育やレクリエーションを目的として実施され、ボランティア活動として行われることが多く、医療の専門家が指導しているものではありません。動物と飼い主（ボランティア）には一定の基準が必要で、対象者が高齢者、傷病者、障害者等である場合が多いので、事前に充分学習しておく必要があり、動物たちもその適性や一定の基準が要求されます。主な活動現場は、各種の高齢者施設やホスピス、ふれあい会等での活動で、活動の記録や効果の判定は必要としていません。

②動物介在療法 (Animal Assisted Therapy=AAT)

AATは人の医療の専門家が専門的な治療行為として行うもので、対象者の身体的機能、社会的機能、精神面の向上・回復等を目的としています。個々の患者に合わせた治療目標を設定し、その目標に合わせて適切な動物とボランティアが選択されて実施され、その経過を記録し、治療後は効果について評価を行います。参加する動物はそれぞれの治療目的に沿った高い基準をクリアしていることが必要です。

AATは人の医療の補助療法のひとつとして、近年急増する慢性疾患やリハビリテーション、精神科領域、小児医療やホスピス等で次第に取り入れられ始めています。

③動物介在教育

(Animal Assisted Education=AAE)

AAEは児童の教育に動物を介在させることによって、児童の道徳的、精神的、人格的な成長を促し、学校を中心としたコミュニティに恩恵をもたらすことを目的としています。さまざまな学校のカリキュラムに動物を介在させることで、学習

効果、意欲の向上、およびコンパニオンアニマルの正しい飼育の方法を身につけ、命の大切さ、ぬくもりを体感し、人間以外の生きものをも尊重する心と責任感を育てることを目指しています。AAEは子どもたち各々の年齢に適したカリキュラムで実行され、安全が確保されなければなりません。

また、活動に参加する動物の安全と福祉は、AAEにおいても常に保障されなければなりません。

この活動は主に、幼稚園、小学校、中学校、児童館、長期入院病棟の院内学級等で活用されています。



さて、これらの活動を総称してアニマルセラピーという言葉を使っていますが、実はこの言葉は、これらの活動が、現公益社団法人日本動物病院福祉協会により1986年にスタートした「人と動物のふれあい活動 Companion Animal Partnership Program=CAPP活動」によって全国各地に広がったことから、多くのメディアが取り上げ、「アニマルセラピー」と呼ぶようになったメディアの造語であるため、海外での発表や文献等では通用しない（動物を治療することをアニマルセラピーと称したことがある等）ことをご理解ください。また、動物を介在させるこのような活動では、まだまだ危機管理が問われます。上記のCAPP活動は、この26年間で12,374回の活動を行うにあたって、各種の保険を設定し、活動ボランティアおよび動物たちの教育および管理を徹底することにより、幸い事故やアレルギー等の発生の報告はありません。

動物介在療法の歴史

動物介在療法で、長い歴史をもつのが「乗馬療法」です。起源は古代ローマ帝国で、戦場で傷ついた兵士たちのリハビリに乗馬が用いられ、近世になってからも、1875年にパリで乗馬が麻痺を伴う神経障害にきわめて有効な療法であるという報告がなされ、現在、乗馬療法はひとつの完璧な治療システムとして、NARHA（北米障害者乗馬協会）等が組織されて世界的に活用されています。

その後、ヨーロッパ各国の精神障害者施設や軍人病院でも活用され、1960年代になり、アメリカにおいて、心理学者のボリス・M・ロビンソンが子どもや大人にとってペットとの接触が治療的な効果を与えることを詳細に報告しました。そのき

っかけとなったのは、心理療法をする場面に犬がいたときに、引きこもりの強い子どもを治療にうまく導入できたことでした。彼はペットが「過渡的な対象」として機能し、子どもは最初にペットと、次にセラピストと、そして後にほかの人々との関係を形成することができると発表しました。

ペンシルバニア大学のエリカ・フリードマンとアーロン・H・カッチャーは、高血圧患者の症例で、ごく普通に休息しているときより、犬をなでたときや水槽で泳ぐ熱帯魚を見ているときのほうが血圧の安定化がみられることを報告しています。その後、1992年にオーストラリアのベーカー医学研究所で行われた調査では、心臓病で危険性のある患者5,741人を対象に行った報告で、動物と暮らしている784人の血圧は動物のいない暮らしの人より平均値が低いこと、減塩食やアルコール摂取を控えた効果と同じように血中のコレステロール値が低く、心臓発作の発生が少ないことを、それまでの報告から更に母集団を大きくして報告しています。

ヒューマンアニマルボンド～人と動物との絆 (Human Animal Bond=HAB)

この言葉は、歴史的なさまざまな人と動物とのふれあい（相互作用）から生まれる効果の総称です。その効果を得るために行われるアニマルセラピーは、1960年代に入り多くの専門家によって研究成果が発表され、科学的に注目を受け、人と動物との相互作用（HAB）に関する成果の研究と理解を促進させるためにアメリカのワシントン州立獣医科大学学長レオ・ビュースタッド博士と精神科医のマイケル・クロック博士は、人と動物の相互作用による効果を「ヒューマンアニマルボンド(人と動物の絆=HAB)」と提唱しました。

現在、アニマルセラピーを主催する団体は世界的に数多くありますが、その現場（AAA, AAT, AAE）を担っているのは、ほとんどがHABの理念に賛同する一般家庭の適性ある人々とその家族として暮らしている動物たちによるボランティア活動です。

近年アニマルセラピーは、地球環境の悪化、都市化、核家族化の進む中で、人々の心や体、そして社会問題の解決にも一役を担い、多用されつつあります。

“健康の概念”をいかに教えるか

—子どもの気づきと意欲を大切にした授業—

神奈川県相模原市立光が丘小学校教諭 溝口 卓磨



1. 本校の研究・保健学習の考え方について

本校では健康教育について、運動領域・保健領域・日常活動の3つの柱に重点を置き、研究を進めている。

保健領域では、健康の大切さを知り、毎日の生活に生かし、明るく元気に過ごせる子の育成をめざしている。また保健学習の進め方として、次の点を意識した授業展開を図っている。

- 健康のよさを感じて、知って、考える、課題解決・活用型の保健学習
- 陽転思考（なりたい自分になるためのプラス思考）を基盤にした学習
- 友達とのかかわり合いを図る学習
- 保護者、地域、関係機関の協力を得ながら行う学習

2. 大単元のねらい

3年生で初めて出会う保健学習において、いちばん難しいのが、健康の概念である。「健康ってどんなことかな？」との問いに、子どもたちからは、心の面に観点を置いた発言が出にくい。また概念を理解できても、それをどう生活に結びつけていくかが、大きな課題であると考えた。そこで、学習指導要領と本校の保健領域の考え方を絡めて、以下のねらいを設定した。

- ねらい……健康とは体だけでなく、心の状態とも深く結びついていることを理解し、自分自身の生活を振り返り、健康によりよく生活できるよう、自己課題を実践していけるようにする。

3. 単元計画

単元計画は、保健4時間に総合の時間1時間をプラスして計5時間で組んだ。各時の学習内容と活動の概要は次のとおりである。

【第1時】けんこうっていいね

- 自分の身近や生活の中から健康探しをする。
- 教科書を参考に、健康だと思う場面を見つけ、理由も加えて発表する。
- 健康だとどんな「よさ」があるか考え、自分が楽しく過ごすために心がけていることを記入欄に書き、みんなに紹介する。

【第2時】けんこうな1日の生活

- 自分の1日の生活時間表を作成し、自分の生活を振り返る。
- 生活のリズムが崩れるとどういう生活になるのか考える。
- 振り返りの中で自分の課題を決め、健康を意識した生活に1週間取り組んでみる。

【第3時】けんこうな生活に取り組んでみて

- 自分の課題を設定した理由や、1週間取り組んでみての感想を伝え合う。
- これからも意識して生活できるよう、何人か、家の人からのメッセージを紹介する。

【第4時】体のせいけつ

- 「清潔点検表」を各自チェックして、自分の状態を知る。
- 手を石鹸で洗う・水で洗う・洗わない、の3通りの汚れ具合から、石鹸で洗い洗うことの必要性を知る。
- 下着やハンカチも、汚れているように見えなくても、使用した後は、毎日取り換える必要性を理解する。

【第5時】部屋の明るさと空気

- 部屋が暗いときや、逆に明るすぎるときはどうすべきか、考えてみる。
- 換気についても考え、身のまわりの環境を整えることの大切さを理解する。
- 学校では、みんなの健康を守るためさまざまな活動が行われていることを理解する。

4. 本時の展開 (1 / 5)

(1) 本時のねらい

健康とは、体と心が連動して成り立つ状態で、主体要因と環境要因が互いにかかわっていることを知り、健康に過ごしていく意識を高める。

(2) 本時の展開 (表1 参照)

5. 実際の授業

自分の生活を振り返り、「どんなときに健康であることを感じるか」を記入させたところ、ほとんどの児童が「かぜをひかないとき」「元気に学校に行くことができるとき」などの身体的な側面をあげた。また資料のさし絵や、本校で常時取り

[表1] 本時の展開 (1 / 5 時間)

学習内容と活動 (・ = 予想される児童の反応)	指導・支援 (★ = 評価)
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 学習の課題……健康とはどういうことなのか考えてみよう。 </div> <p>①自分の生活を振り返り、どんなときに健康だと感じるかプリントに記入し、発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎日元気に学校にきているとき。 ・休み時間に外で遊んでいるとき。 ・食事を残さず食べているとき。 ・毎日よく眠れているとき。 ・友達に元気よくあいさつができるとき。 ・笑顔が絶えないとき。 <p>②教科書(光文書院) 4～5ページの絵を見て、健康だと思う場面とその理由を発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・部屋の窓を開けて換気をしているところ。理由は、空気の入れ換えですっきりするし、かぜの予防にもなるから。 ・ふろに入っているところ。理由は、1日の疲れがとれるから。 ・教室で手を挙げてしっかり発表しているところ。理由は、頭がすっきりしていて、勉強に集中できるから。 <p>③健康を主体要因と環境要因に分け、健康だとどんな「よさ」があるかを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なんでもおいしく食べることができる。 ・毎日が楽しく生活できる。 ・病気に負けない体をつくることができる。 <p>④健康とは、やる気がある、元気に遊べるなど、心や体の調子がよい状態であることをまとめる。</p>	<p>○3年生から保健の学習が始まり、「健康」についてみんなで考えていくことを知らせる。</p> <p>○学習カードには、食事や外遊び、睡眠、登校などの様子のイラストを入れ、主体要因に気づくヒントを与える(資料1)。</p> <p>○発表を板書する際は、必ず具体的なものと心的なものに分けて書き、なぜ別々に分けて書いたのか、児童に気づかせるように意図する。</p> <p>○心的状態のものが出てこない場合は「みんなの心にも健康があるんだよ」と投げかけ、考えさせる。</p> <p>○理由をていねいに説明させることで、さまざまな場面で健康を多角的にとらえることができるようにする。</p> <p>○健康は今だけのことではなく、生涯にわたって、これからの自己形成にもつながっていくという意識を高める。</p> <p>★これからの生活の中で、健康にごそようとする意欲をもつことができた。【関心・意欲】</p>

組んでいる食育、外遊びの励行、睡眠の重要性を説いている効果もあり、主体要因についての発言もあった。ただ予想していたとおり、心的側面や環境要因について、気づく児童はいなかった。

【児童の発言から】

発表の際、1人の児童が「自分からあいさつできること……？」と、それを健康とっていいかどうか、本人も疑問をもちつつ伝えてくれた。それまで板書で身体的健康面を書いていたその隣に新たに列を設けて、その児童の意見を書いた。そして「今までに出てなかった意見だね」と告げたとこ、気づいた児童が数人、「友達と笑顔で仲よくいられるとき」「勉強に集中できるとき」という意見を出してくれた。

【児童の反応を予想して】

心的側面に対する意見が出てこなければ、「みんなの心にも健康はあるんだよ」と、教師側からの投げかけから、児童の気づきを広げようと考えていた。しかし、幸いにも児童自らが意見を出してくれたので、「この2列に分けて書いた健康のことで、なにか気づいたことはない？」と2つの違いに気づかせる発問をした。当然、「左の列は体のこと、右の列は心のこと」と3年生らしい発言が出たので、数人の気づきを全体に広げることができた。そこで教科書を広げ、健康に対する概念を確認した。

【主体要因と環境要因のつながり】

3年生では、自分の体のことについては考えられるが、身のまわりのことについて考えるのは難しい。「心や体の状態がよいことを健康ということの確認をしたあと、主体要因と環境要因からなる健康場面を教科書から探し、発表し合った。しかし、換気や清掃などの衛生面、まわりの人々の支えや、家族の支持等の環境面から、自分の健康が成り立っていることに気づく発言やつぶやきはなかった。そこで強引に、「みんながしっかり食べることができ、ぐっすり眠れたり元気に登校できたりしているのはなぜなんだろう？」という発問をした。

- 「家族がいつも食事をつくってくれるから」
- 「見守りレンジャーさんが安全を見守ってくれているから」
- 「毎週ふとんを干してくれているから」
- 「かぜをひかないよう気づかってくれているから」

ほけん学習プリント

3年 組

1. 自分の生活をふりかえり、どんなときにけんこうだと感じますか？

[.
.
.]

2. けんこうだと、どんないいことがあるでしょうか？

[]

3. けんこうにすごすために、気をつけていることはありますか？

[]

4. 今日の学習で思ったこと・感じたこと

[]

などの意見が出たので、主体要因と環境要因は深くかわり、結びついていることを確認した。ただ、半ば強引に自らルールを敷いて結びつけたものであるため、発達段階から考えても、この意識を生涯自分の健康の一部として、かけがえのないものとして思えるかについては課題が残った。

6. 成果

第2時に自分の生活表を作成し、自分自身の課題を決め、その課題のもと、1週間取り組んでみた。

資料2「けんこうプリント」の女子は、あまり朝食を食べずに登校する児童である。健康ということばに目を向ける第1時の学習や、自分の生活を振り返ってみる第2時の学習によって、「朝食をとること」を自分に合った課題と位置づけることができた。取り組めた・取り組めなかったは別のこととして、取り組もうとする気持ちももてたことは、大きな成果であると考えた。

また、第1時の際はあまり手応えがなかった、心的側面の「お手伝いをする」ことを課題として取り組んでもいる。課題を決める枠を2つしか用意していなかったが、児童自ら3つや4つに増やし、自身の課題を積極的に考え、取り組む児童も何人かいた。

児童の会話の中にも、朝食の中身や就寝時刻についてなど、自らの生活習慣に関する話題も多く



けんこうな1日をすごすために 気をつけて取り組んでいきたい こと	(1) 日	(2) 日	(3) 日	(4) 日	(5) 日	(6) 日	(7) 日
毎朝食じをとる	◎	○	◎	◎	△	△	△
じゅくの宿題をやる	◎	○	◎	◎	○	◎	○
外でけんきよく遊ぶ	○	△	○	○	△	△	◎
家のおてつたいをする	○	○	○	◎	△	△	○

よくできた…◎ まあまあできた…○ 今一歩…△

取り組んでみての感想(体のへん化、心のへん化など……)	お家の人から
朝食をとったうせんせんお昼まで せんせんおなかすかなかたです	この日は、こせせとがゆが何の書いていた、よく何が書いてあったか？と 聞いてみたけど、このプリントを渡された時に「早くお昼まで食べてほしいよ」と よく朝の食事の準備をやるようになってきた。(リポートを聞いてうれしかった)

→ いつ朝食をとらなかつたと言うことが多いけど
朝食、T大事だと分かつたです！

▲左のカードが
[資料1]
ほけん学習プリント
・実際は記入のヒントと
なるようなイラストが
記入欄のまわりに入る。

▲右のカードは
[資料2]
けんこうプリント
・記入例の児童は、これ
まではあまり朝食をと
らずに登校することが
多かった。

聞こえるようになってきた。本校が健康教育を研究しているということから、常時「日常生活の中の健康」について、話をしていることもあるが、3年生の段階で、自分自身の健康について考えられる土台ができたのではないかと考える。

7. 課題

①養護教諭との連携

本校の保健学習では、必ず養護教諭に単元の中でT.Tとして入ってもらっている。授業の中で養護教諭が話を聞かせる必要性をつくりあげ、児童が養護教諭の話を受くなかで、関心や理解を深めていくのがねらいである。ただここまでの「健康な生活」の第1時から3時までにおいては調整不足もあり、養護教諭に授業に入ってもらえなかつた。第1時の担任と児童が健康についてのおさえをしたあと、あらためて養護教諭から「健康」についての話をしてもらおうことによつて、健康の概念についての理解が深まっていたのではないかと考える。第4時には入ってもらい、手洗い・うがいの効果を科学的に話してもらいたいと思っている。

②保護者へのはたらきかけ

本校では「校内研だより」として、月1回健康教育に関する内容を、児童のデータも絡めて発行している。また今回「けんこうプリント」のようなカードによる取り組みには、児童の感想や取り組んだことに対して、保護者から必ずコメントを

記載してもらうことにしている。どんなことを学習しているのかを知ってもらい、子どもの変容を見とってもらうのがねらいである。ただ学習カードだけだと一過性のものになる感もあるので、学年・学級だよりも、毎回児童の健康に関する内容を記載すれば、さらに保護者の意識・関心も高まるのではないかと考える。

③ねらいに対して

設定したねらいに対して、感じる・知る・考えるの3要素がリンクし、学習活動の中で生き生きと子どもたちが表現できたであろうか。

最初の保健学習ということもあり、教師主導で授業を進めていった。ねらいが現在の児童の感覚に対して、壮大であったためである。今後は児童自らが主体的に学習が進められるよう、ねらいのさらなる検証や教材研究、また発達段階に応じた授業研究に取り組んでいきたい。



本校では、子ども1人ひとりが、実践を通して健康の大切さを知り、運動や生活のさまざまな場面で仲間や家庭・地域の人々と豊かにかかわることで、明るくたくましい児童が育つであろうという仮説のもと、研究を進めている。重点は「心の健康・豊かなかかわり合い」である。

今後も教育活動全体を通して、児童が生涯にわたり、自らの健康について考え、豊かなかかわり合いの中でよりよい生活が過ごせるよう、努めていきたい。
(みぞぐち・たくま)

学習内容を効果的に児童に伝える教材や指導の工夫

—「内容の整理表」と「お話」を使った授業—

東京都江東区立明治小学校主幹教諭 **黒木 美穂**



新学習指導要領では、児童の思考力・判断力等の育成をめざして「知識を活用する学習活動」を授業の中に取り入れることの大切さにふれています。これは、習得した知識を実際の生活場面で実践することをめざしたものではありません。授業の中で学んだ具体例を抽象化し、知識として定着させていくことだと考えています。

そのためには、限られた1時間の中で“何を教えなければならないのか”という「学習内容」をはっきりとさせることの重要性を感じています。学習内容を單元ごとに整理し、それを確実に定着させる学習活動を行うために「内容の整理表」を

作成しました。この整理表は、東京都小学校体育研究会の保健領域部会でも提案されていますが、一単位時間でおさえておかなければならない用語やキーワードを明確にできるよさがあります。また、内容に関する原理・原則を明らかにすることもできます。

今回は、6年生の「病気の予防」の第2時を例にあげて紹介します。本時は、物語の中から、主人公がなぜ熱を出し、インフルエンザにかかってしまったのか、どうすれば予防できたのか、ということを考えていく流れで作成しました。

1. 単元の目標

- 病気の予防について関心を持ち、意欲的に取り組もうとすることができるようにする。【関心・意欲・態度】
- 病気の予防について、話し合いをもとに考えることができるようにする。【思考・判断】
- 病気の起こり方とその予防について、理解することができるようにする。【知識・理解】

2. 指導と評価の計画（第2時…「病原体がもとになって起こる病気を予防しよう」）

学習内容	関心・意欲・態度	思考・判断	知識・理解
病原体がもとになって起こる病気の予防には、病原体が体内に入ること防ぐこと。	病原体がもとになって起こる病気の予防について、友達と意見を出し合う話し合いに進んで取り組もうとしている。	病原体がもとになって起こる病気の予防について、資料や話し合いをもとに予想している。	病原体がもとになって起こる病気の予防には、病原体が体内に入るのを防ぐ方法があることについて、具体例をあげている。

3. 内容の整理表（第2時）

学習内容	学習内容にかかわる具体例	用語やキーワード
病原体がもとになって起こる病気の予防には、病原体が体内に入ること防ぐこと。	<ul style="list-style-type: none"> ・インフルエンザはインフルエンザウイルス（病原体）が原因で起こる病気である。 ・インフルエンザは病原体（インフルエンザウイルス）が体に入り、数が増えることで発症すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・インフルエンザ ・インフルエンザウイルス ・病原体 ・せき、くしゃみ ・空気中 ・鼻や口から体内へ
	<ul style="list-style-type: none"> ・インフルエンザの予防には、病原体が体に入ることを防ぐこと。 ・病原体のありそうなところに近づかないこと。 ・うつる道筋を断ち切ること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・マスク ・うがい ・人混みを避ける ・うつる道筋を断ち切る

4. 1時間の流れ

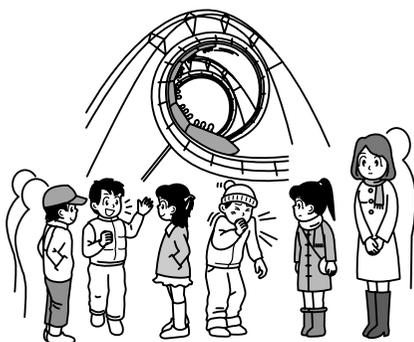
学習内容と活動 (・ = 予想される児童の反応)	教師の支援 (★ = 評価)
①今日の学習課題を知る。	
病原体がもとになって起こる病気を予防するには、どのようにすればよいのだろうか。	
<p>②資料の「お話」(p10資料1)を聞き、熱が出た原因を考える。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>あきこさんは、どうしてこんなに高い熱が出てしまったのでしょうか。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・寝不足だったから。 ・寒かったから。 ・近くにせきやくしゃみをしている人がいたから。 ・夕食をとらず、ふろにも入らないですぐに寝てしまったから。 ・かぜをひいたから。 ・ウイルス <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>ウイルスが体の中に入ると熱が出ます。どの場面でウイルスは体の中に入ったのでしょうか。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・寝不足のまま、朝早く家を出たとき。 ・行きの満員電車の中。 ・遊園地で、乗り物を待っているとき。 ・家に帰って、うがいをしないで寝てしまったとき。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>高い熱の出る病気、インフルエンザは「インフルエンザウイルス」が体の中に入り、数が増えることで発症します。</p> </div>	<p>○病原体（ウイルス）が原因であることをおさえる。</p> <p>○感染経路（ウイルスが、せきやくしゃみで空気中へ→鼻や口→体内へ）をおさえる。</p>
<p>③インフルエンザにかかってしまった原因をもとに、予防の方法について話し合う。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>あきこさんは、インフルエンザにかかってしまったんですね。では、わかったことをもとに、どうすればインフルエンザにかからないですんだか、予防の方法を考えてみましょう。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・満員電車に乗らなければよかった。 ・時間をずらせばよかった。 ・マスクをして出なければよかった。 ・前の日にちゃんと寝ておけばよかった。 ・電車の窓を開けてもらえばよかった。 ・帰ったとき、うがい、手洗いをすればよかった。 ・予防接種を受けておけばよかった。 	<p>○発生源、感染経路、うつる側の状態にそれぞれ着目させ、グループで話し合わせる。</p> <p>★インフルエンザの予防について、友達と意見を出し合う話し合いに進んで取り組みもうとしている。 【関心・意欲・態度】</p> <p>○「うつる道筋を断ち切ること」「発生源に近づかないこと」をおさえる。</p> <p>★インフルエンザの予防について、資料や話し合いをもとに予想している。 【思考・判断】</p>

学習内容と活動 (・＝予想される児童の反応)	教師の支援 (★＝評価)
<p>④出てきた予防の方法をグループ分けし、予防するにはウイルスが体の中に入るのを防ぐことを理解する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>いろいろな予防方法が出てきました。 これらをグループ分けしてみましょう。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・満員電車／時間をずらす／行かない →病原体のありそうなところに近づかない。 ・マスク／うがい／手洗い →うつる道筋を断ち切る。 ・寝不足 →抵抗力を高めておく。 <p>⑤今日の学習でわかったこと、気づいたことをワークシートに記入する。(ワークシートの例：資料2)</p>	<p>○病原体がもたになって起こる病気の予防には「うつる道筋を断ち切ること」「発生源(ウイルスがありそうなところ)に近づかないこと」をワークシートを使ってまとめさせる。</p> <p>★病原体がもたになって起こる病気の予防には病原体が体に入るのを防ぐ方法があることについて、具体例をあげている。【知識・理解】</p>

【資料1】ある日のあきこさんのお話

1月最後の日曜日のこと。
あきこさんは、家族で遊園地に出かけました。
楽しみにしていたので、前日の夜は、なかなか眠れませんでした。

朝早く家を出たのですが、遊びに行く人が多かったようで、電車は満員。窓も閉めきったまま。
とても息苦しい感じがしました。
近くではせき込んでいる人もいました。
約1時間、遊園地まで満員電車の旅でした。



あきこさんが遊園地に着くと、たくさんの方が来ていました。
外は冷たい風が吹いていて、とても寒い日でした。
でも、ずっと行きたかった遊園地だったので、乗りたいジェットコースターに1時間待ちして乗ったり、できたばかりのアトラクションに並んだりもしました。
並んでいた人の中には、くしゃみをしている人もいました。
あきこさんは日が暮れるまで、ぞんぶんに楽しい時間を過ごすことができました。
家に帰ってきたあきこさんは、はしゃぎすぎたせいか、疲れてしまい、夕飯も食べず、お風呂も入らず、すぐにふとんに入り、寝てしまいました。

あれから4日後。あきこさんの様子がおかしいのです。
「あれ？ 体がだるいな。ぞくぞくしてきた……」
あきこさんは、夜になるとなんだか熱っぽかったので、熱を測ってみると、平熱よりだいぶ高くなっています。
その高熱は次の日も下がりませんでした。
その後も、熱はなかなか下がらず、病院に行ったらインフルエンザとわかり、あきこさんは結局1週間、学校を休んでしまいました。



2. 病原体がもとになって起こる病気の予防

組 番 名前

病原体がもとになって起こる病気を予防するにはどのようにすればよいのでしょうか。

1. あきさんは、どうすればインフルエンザにかからないですんだのでしょうか。予防の方法を考えてみましょう。

2. 出された予防の方法をグループ分けしてみましょう。

3. インフルエンザはどのようにして起こるのかをまとめてみましょう。

- ①インフルエンザの原因となる〔 〕が、せきやくしゃみで空気中に出る。
 ②それが、〔 〕や〔 〕から体に入る。
 ③体の中で〔 〕が数を増やすことによって発病する。

4. 今日の学習で、わかったことや気づいたことをまとめてみましょう。

子どもたちは、物語から主人公がどうして熱を出したのか、自分の経験も加味しながらよく考え話し合いを行っていました。単元終了後のテストでは、インフルエンザではなく食中毒（O-157）も病原体がもとになって起こる病気であることから、食中毒の予防方法を記述させました。

「手をきれいに洗ってから食べる」「調理器具を消毒する」「十分加熱してから食べる（病原体をなくす）」「調理した食事はすぐ食べる（病原体を増やさない）」など、予防の原理・原則である「病原

体を体の中に入れない」を理解できている記述が多く見られたことから、学習内容がきちんと子どもたちの中で理解されていたといえるのではないのでしょうか。

私自身、内容の整理表を作成することで「何を学ばせなければならないのか」を整理できるようになってきたと思います。限られた時間の中ではありますが、子どもたちが考えることのできる授業をこれからもつくっていきたいと思っています。

（くろき・みほ）